

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
日本画	教授	北田 克己	機能を有していた装飾が絵画に取り組み始めたころの下絵や料紙と、その審美性に興味を引かれる。大小の発表の機会を捉えて表現上の試みを行ってきた。膠文化と膠技法研究では、海外を含めて研究ネットワークが広がりを見せ、注力してきた教育普及については刊行物を成果とできた。大学の文化財保存修復研究所を地域の文化財保護、研究の地域拠点とすべく専心して運営に当たった。
日本画	教授	岡田 眞治	50周年記念の年で、三本の展覧会を企画、開催することになり、忙殺された。個人の研究活動は個展、グループ展とも精力的に開催することができた。
日本画	准教授	井手 康人	目標はある程度達成されたと思う。今後もそれぞれの活動に積極的に取り組みたい。
日本画	准教授	吉村 佳洋	日本画の制作研究においては個展を三回開催し、自身の研究内容を客観的に考察する事が出来た。今回の反省点を今後の制作に活かせるよう研究を重ねたいと考える。また今年度から科研に採択されたことにより、より深く日本画画材や技法の研究が深まると考えられる。
日本画	准教授	岩永 てるみ	日本画創作研究では従来よりのグループ展以外にも分野や所属を超えた企画展への出品の機会が多くあり、今後の創作活動への良い刺激となった。また、科研研究の「月次祭礼図」の総合復元研究では、京都での研究会の開催や作品の特別観覧などもあり、室町絵画に対する見聞が広がった。
日本画	准教授	阪野 智啓	日本画制作は個展を開催したものの、作品のさらなる充実をはかる必要性を強く感じた。古典絵画研究では重点的に行っている室町時代屏風絵の研究に成果が現れつつあり、外部識者からの評価とともにネットワークの広がりもみせ、今後の研究の展開とともに教育にも反映させたい。運営や社会貢献では特に文化財保存修復研究所の周知に更なる努力を要する。
油画	教授	寺内 曜子	個展で過去30年間の制作の一貫性が認められたり、作品が美術館の収蔵品になる等、研究活動は外部からの評価が高かった。芸術資料館長としては、特にサテライトギャラリーの展覧会企画を国際交流企画を含む6件以上たて多忙を極めたが、入館者数7500人、展評も新聞雑誌に多数とりあげられる良い結果となった。
油画	教授	設楽 知昭	東京日本橋の不忍画廊で個展を開催し、普段の研究制作を示し成果をあげた。担当した博士後期3年の学生が博士本審査で評価され合格となった。芸術教育・学生支援センター長として皆さんと協力して責務を遂行した。今年度は、芸術教育・学生支援センター運営委員会を数回開催しFD活動とも連携できた。
油画	教授	阿野 義久	今年度は50周年記念事業の開催が中心の活動であった。専攻企画の「INTERWOVEN」と「Resonating works」の2つの展覧会に専攻の企画委員長として取り仕切り無事終了した。社会貢献については生涯教育の分野において発展的な事業参加をおこなうことが出来た。
油画	教授	倉地 久	個人の研究発表としては、バンコク・東京・名古屋での個展を開催し、アート誌や批評誌に取り上げられ、高い評価と成果を得る事ができたと実感している。また、7年間続いた国際プロジェクトも名古屋とシカゴでの展覧会開催など、研究成果を発表でき一定の評価を得る事ができた。トリエンナーレ連携事業でもある3大学連携もトリエンナーレの開催年度でもあり、充実した結果を残す事ができたと確信している。また、将来計画及び中期計画も例年同様まとめることができた。

油画	教授	額田 宣彦	・研究活動～目標を達成、研究を深めることができた。・教育活動～ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施、学生の自主性、思考力、実践力を育てた。・大学運営～当初計画より業務が増加し研究活動の一部に支障があった。次年度は研究とのバランスに配慮したい。・社会貢献～展覧会企画開催、展覧会記録集の作成、展覧会協力、シンポジウム企画開催、他大学との連携事業などを実施した。特に企画開催した展覧会、シンポジウムは、準備に十分な時間を費やし検討を重ねたので非常に充実したものとなった。
油画	准教授	井出 創太郎	7年間に亘る、スコットランド在住作家との国際交流プロジェクト「Double Diablerie」の完結を披露する展覧会をサテライトギャラリー及びジョン・デヴィッド・ムーニー財団ギャラリー（シカゴ）で行った。今後は本共同制作研究の成果を踏まえた研究を個人的に継続展開してゆく計画である。美術プロジェクト「落石計画」（旧落石無線送信局／北海道根室市落石岬）は第9期を実施し、第10期への足がかりを掴む大きな成果があった。油画実技Ⅰの担当授業「版画研究」では、落石計画ワークショップでおこなったサイアノタイプを、新たな試みとして授業内容の一部とした。今後も、研究活動と連動した授業展開に努めて行きたいと考える。
油画	准教授	高橋 信行	今年度、大学運営や社会貢献などの活動には積極的に取り組めたが、研究活動ではそれほどの結果が残せなかったように思う。 来年度はサンフランシスコでの展覧会もあるので研究活動に時間を割き充実させたい。
油画	教授	白河 宗利	研究活動においては、専門である絵画の技法材料の研究分野での助成金を複数獲得したことにより新たな知見や成果が上がった。その一方で技法材料研究の比重が大きくなりすぎている感があり、来年度からは創作研究とのバランスを取りながら進めていく必要がある。
油画	教授	大崎 宣之	研究発表として国内5件、海外3件の展覧会に出品した。また、教育活動として美術館などでの課外活動や研究室主催の展覧会の開催（2件）を行う。各種委員の活動や、社会活動として大阪市「咲くよこの花賞」の受賞、文化財団へのパブリックコレクションなど充実した年度となった。
油画	講師	岩間 賢	本学に赴任する前からディレクターとして各地で取り組んできたアートプロジェクトは、文化庁が進めている事業と合致し多数の採択を受けた。また、それらの成果報告会を各地で開催し、地域連携強化も図ることができた。絵具精製研究は難題としていた「藍」の絵具づくりに着手した。教育活動では着任1年目の課題を検証し、学生に沿った質の高い実技授業カリキュラムを編成した。大学運営では、創立50周年記念事業の油画専攻委員として展覧会運営に関わった。社会貢献では、継続実施してきた事業や文部科学省中国政府奨学金審査委員に加え、文化庁事業「文化芸術プロデューサー研修」にも新たに関わり、人材育成事業への取り組みをはじることができた。
油画	講師	猪狩 雅則	全体的に計画を全うできた年であった。常勤教員として5年目の職務となり、大学の組織構造などをようやく全体的に把握できてきたと感じている。その上で、特に各委員会において、適宜判断しながら取り組むことができた。学生との対峙の仕方は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、比較的対応できてきたように思う。
油画	講師	安藤 正子	教員一年目ですが、研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献、それぞれの分野で概ね目標は達成できたと思います。来年以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。
彫刻	教授	大塚 道男	国画会が主催する国展を中心に制作発表する。作品制作と発表の機会かともなわず、今後の展開について万全をはかりたい。社会貢献において自ら学ぶことが多く、また、各方面の方々と交流など有益にかかわった。学生への指導については課題も多く、個人指導・対話等が結果として少ないように思われ、もう一歩踏み込む姿勢で対応していきたい。

彫刻	教授	土屋 公雄	28年度の研究活動においては、愛知芸大創立50周年記念事業としてアートプロジェクト「フォルテ」野外作品を制作し、同事業において彫刻専攻オリジナル企画とし、本学卒業生による「Blue Birds/森の向こう」の展覧会を実施することができた。教育活動や大学運営は例年のよう、後期博士課程並びに学部/院において独自の特別講義を実施、理論を中心に据えた授業を展開し、委員会では、人事委員長、創立50周年記念副委員長を務めた。社会貢献としては、継続プロジェクトのアートによる地域活性化企画を展開した。以上のことから、自己評価として目標はおおむね達成することが出来た。
彫刻	教授	神田 每実	平成28年度当初の目標は、概ね達成することが出来たとと思われる。しかし、学会への参加目標に見るように、参加自体が叶わなかったものも存在するため、無理のない計画を立案する必要であることを改めて確認した。一方、学外における活動は、様々な応用を要求するものであって、ここに、大学をはじめとする教育機関での実践を、実学としての段階へとステップアップさせる様々な条件がそろっていると改めて確認されることとなった。社会において刻々と変化する"状況"の中において、新たにフィールドと目標を定め、総合的な活動を実施することは極めて重要なことであり、次年度からは、このフィールドにおける総合的なプロジェクトを中心とした、授業・研究の活動を立案実施したいと考えている。
彫刻	准教授	竹内 孝和	研究活動では当初予定していた2つの個展と1つのグループ展の他にドイツのクリスチャン・マークス ギャラリーの個展の開催やノイボイギャラリーでのグループ展も行った。教育活動は概ね良好な成果が得られたと感じている。また大学運営では2つの委員会委員を務めた。社会貢献は今後の課題としたい。
彫刻	准教授	森北 伸	今年度は本学の50周年事業もあり、社会貢献活動及び本学の広報として活動が出来ました。 また教育活動においても、学生が上記の活動に参加でき、意義のある時間が過ごせたと思います。
彫刻	講師	村尾 里奈	本年度は、国際交流、教育活動、社会貢献に力を入れた。企画した4つの展覧会の内2つが採択となり、展覧会助成を2件、研究助成を1件獲得することができた。米国の大学で講演会と講評会を行った。
芸術学	教授	中 敬夫	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「研究活動」に関しては、ほぼ二年分の仕事を一年でこなしたので、きわめて順調に進んだと言える。</li> <li>・「教育活動」と「大学運営」に関しては、例年通り、ごく順調に進行した。</li> <li>・「社会貢献」に関しては特に言うべきことはない。</li> </ul>
芸術学	教授	小西 信之	今年度は、大きな翻訳を2つかかえ、大部分の時間をそれに割いているが、出版されればともに現代美術界にとって有意義な業績となる（出版は2019年を予定）。現在は最大限にこれに注力しなければならないが、それは概ねできている。その他教育活動、大学運営は特に大過なくできていると考えている。また今年度は台湾とイタリアからそれぞれ1名、日本の現代美術を研究する留学生を受け入れた。
芸術学	准教授	高梨 光正	博士を含む学生指導及び芸術講座、50周年記念シンポジウム、「災害と文化財」講座など、学生のみならず専門家向けの講座も含め、多岐にわたる活動を実施したが、一方では本来の研究業務がおろそかになってしまったことを猛省している。
芸術学	講師	本田 光子	研究面では開学50周年国際シンポジウムへの参加と報告書執筆、紀要への投稿等を着実に行なった。教育面では本学図書館所蔵絵巻を活用した日本美術史の講義・実習が成果をあげた。1年を通した卒論ゼミも指導のうえで効果的だった。さらにハラスメント相談員や博物館学課程委員長としての任務を全うし、多岐にわたる業務の一つ一つ取り組み、次年度へとつなげることができたと実感している。
デザイン	教授	白木 彰	<p>教員としての学生への指導は、集中できないことも多く非常に反省している。しかし、担当した学生が卒業・修了制作で良い結果を出しており、学生たちの努力に大いに助けられた。学生に感謝する。</p> <p>大学院美術研究科長、美術学部長としての目標は、不完全ではあるがおおよそ達成できたと思われる。これは多くの方の協力の賜物であり、多くの皆さんに心から感謝している。</p>

デザイン	教授	中島 聡	<p>【研究活動】評価：◎ 昨年度までの科研費による研究の報告書を提出し、次回に向けての研究テーマを決定した。</p> <p>【教育活動】評価：△ CSMへの交換留学生を派遣できなかった。学生指導については適切に指導したが、厳しく評価した。</p> <p>【大学運営】評価：◎ 大学認証評価に向けて教務委員会関係の問題点を精査し、対応した。</p> <p>【社会貢献】評価：△ 依頼に対しては適切に対応したが、今後の研究テーマの発掘には至らなかった。</p>
デザイン	教授	関口 敦仁	<p>全体的には研究、教育、大学運営、社会貢献とそれぞれに当初課題が多かったが、全てをやり通せた充実した一年であったかと考えられる。特に今年度は本学の創立50周年にあたり、3年前から準備を進めてきた全体の事業進行のマネジメントや「芸術は森からはじまる展」の開催管理など、忙しく目づ充実した時間が過ぎた。また、対外的には文化庁のメディア芸術祭20周年展のディレクションや連携事業によるワークショップの開催など、地域や国内の多くの文化普及活動に関われたところを特に自己評価したい。</p>
デザイン	教授	水津 功	<p>ランドスケープ研究、デザイン思考を取り入れた授業、デザインプロセスにおける相互理解に関する認知科学的研究（共進化のデザイン）、オフグリッドデザイン研究は、それぞれにおいて進展が見られた。特にオフグリッドデザイン研究の要となるプロジェクト「針葉樹を主燃料に出来る薪ストーブ」がグッドデザインベスト100、グッドデザイン特別賞（中小企業庁長官賞）を受賞出来たことは励みとなった。</p>
デザイン	教授	柴崎 幸次	<p>研究、教育において、概ね良好な成果を得た。実技において新しい課題設定を行ったことや、海外での講演・展覧会の実施や、研究拠点形成事業（B.アジア・アフリカ学術基盤形成型）の採択など、一定の成果があった。</p>
デザイン	准教授	今尾 泰三	<p>自分自身、要領の悪い人間なので、なかなか目に見える成果は少ないと思う。しかしながら地道に一步步牛歩の歩みではあるが全ての業務、研究を一步步着実に進めて行こうと誠心誠意努力をしている。今後はその成果を目に見えるようにしていきたい。</p>
デザイン	准教授	石井 晴雄	<p>地域の情報デザインやブランディング、地域住民のコミュニケーションについてデザイン制作、研究、発表、社会貢献を行い、受託研究、学長特別研究等の外部資金・競争的資金の導入5件、デザイン・作品制作7件、ワークショップ10回、論文2件、研究発表5件、社会貢献3件あり、当初の計画を上回る成果があった。</p>
デザイン	准教授	森 真弓	<p>今年度は、昨年度作成した新カリキュラムの運営、50周年の広報、瀬戸内国際芸術祭での作品発表、新しく就任した名古屋市景観アドバイザーとしての社会貢献などを中心に、内外に対して積極的な活動が行えた。</p>
デザイン	准教授	夏目 知道	<p>H28年度の目標とした活動は概ね達成することができたと思います。H29年度へ継続する活動もありますので引き続き達成に向けて努力したい。</p>
デザイン	准教授	佐藤 直樹	<p>28年度の活動における当初計画と目標を達成することができた。なかでも研究活動（50周年事業におけるオペラ舞台デザイン）、大学運営（大学サイン計画事業の推進）、社会貢献（大連民族大学における古美術共同研究調査及び卒業審査外部委員）において大きな成果をあげることができた。</p>
デザイン	准教授	本田 敬	<p>今年度より取り組み始めた、「地域デザイン」「産学連携」「立体空間ゼミ」など、短期間ながらも成果が出始めていると感じている。今後これらの継続に加え今年度あまり目立った取り組みができなかった「国際交流事業」を来年度以降強化していきたい。また、研究活動については、まだ2年目ということもあり、成果が少ないものの、デザイン学会等、外部に発表する機会に向けて取組んでいきたい。</p>

陶磁	教授	太田 公典	東京「柿傳ギャラリー」における個展で新たな技法への挑戦などができ今後の制作の方向性を見つけることができた。また科研の研究により新顔料の可能性を見つけ、新たな青色顔料研究の糸口を見つけることができ、今後の制作に生かすことができると考えられる。以上のような制作研究活動が学生に新たな制作技法の可能性を実感させ教育的効果を得ることができた。
陶磁	教授	友岡 秀秋	ここ数年、受託事業と産学連携事業に追われている感がある。しかし元々私の専門であるプロダクトデザインは、社会との関わりのなかで成り立つものなので、おおいにやり甲斐を感じている。不思議なことに学生達にとっても好影響の様である。今後も更に陶磁器関連産業の活性化と若手の人材育成に寄与できる様、努力していきたいと考えております。
陶磁	教授	梅本 孝征	年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、多くの実績と成果を得ることが出来た。その成果をもって、29年度の活動を積極的におこなう。
陶磁	准教授	長井 千春	今年度は教育活動に重点的に取り組み、陶磁領域の博士前期・後期課程3名と学部の学生2名の主査、主指導教員として、全員を卒業・修了に導くことができた。また、受託事業セラミックライフデザインアワードでは、2016年が応募作品の審査及び発表年度にあたり、その準備、審査、展示ほかの運営に取り組んだ。
陶磁	准教授	田上 知之介	研究活動において、素材（土）、釉薬、焼成、上絵付け、スクリーン印刷など、目標としていた研究結果が得られたが、研究論文についての取組みが不十分であった。教育活動において、今回改善された授業内容に加え今後も継続して専攻教員での協議を行い、より効果的な授業内容の構築に努める。大学運営および社会貢献について、今年度の成果を発展させた取組みを実施するとともに、社会および学生に還元させる方策の検討を深める。
陶磁	准教授	佐藤 文子	平成28年度の計画に沿って、積極的に取り組むことができた。特に研究活動においては、個展活動を中心に公募展、グループ展、企画展、国際交流展での制作発表活動を積極的に行うことができた。さらに、陶磁原料及び装飾技法におけるテーマ研究を継続的に実施し、陶磁器における色彩と原料素材についての分析や実験を行うことができた。陶磁原料や釉薬分析値から多岐にわたる陶芸表現の可能性を探求することによって今後創作研究へと展開していきたい。
教養	教授	清道 正嗣	研究については予想外の競合による混乱があったが、ほぼ予定通りに行った。教育・大学運営についても問題なく通常レベルで実施できた。
教養	教授	石垣 亨	外部資金を獲得して行う研究は成果を確実に求められることから、本年度は過去最高の研究業績を示す事となった。それに加えて、複数の学会での役職を兼務する立場となり、年間を通じて純粋に休日を通り過ぎる日が少なくなったことから、過労状態を感じる。また、これまでと同様の授業展開に対して受講生から初めてクレームが来たことから、来年度は授業の内容を変更することで、これに対処することとした。